

## I サムエル 27 章「答えが見つからない中で」

私たち日本の教会は大きな罪責を負っています。戦時下において、国策に協力し、偶像礼拝を行い、偶像礼拝を強要したことです。その罪責を戦後 50 年などの節目に告白し、悔い改めました。そのことは決して当時の牧師や信徒たちの罪を責めたのではなく、ネヘミヤのように自分たちの罪として告白し、そして、過去の歴史から学んで同じ罪を犯さないように覚えて、祈る必要があると決意を新たにしました。

当時の教会の指導者たちも主に従い、信仰に立とうとしたでしょう。けれども、国が戦争に向かっている中で、そして迫害が強まる中で、教会を守り、信徒を守り、家族を守るために、ギリギリの中での選択だったことでしょう。私たちがその場にいたらどうしたでしょうか。しかし、罪を犯したことは事実です。そして、同じ弱さ、罪深さが私たちにもあることを認めます。では、そのような場面でどうしたら良いのでしょうか。

### 1. ガテに逃れる (: 1~4)

26 章 25 節。ダビデが必ず王になるとサウルが言ったことは、すでに 24 章にも記されていました。洞穴での出来事後に語っていました。しかし、サウルは王位を退いてダビデに譲るかというところではないのです。この時もまた、サウルは自分のところへ帰って行き、ダビデは自分の道を行きました。つまり、荒野で逃亡生活を続けるのです。

洞穴での出来事と陣営に忍び込んだ出来事という二つの似たようなことを繰り返しました。その後も変わらずに逃亡生活を続けなければならないダビデはどのような思いだったのでしょうか。彼は主の前に正しくあろうとしています。主に信頼し、委ねています。自分も主に油注がれた者であり、やがてイスラエルの王として立てられるはずですが、しかし、サウルの状態は変わらず、自分と部下たちは逃亡生活を続けなければなりません。この状況はどうしたら解決するのだろうか、とダビデは悩んだのではないのでしょうか。

そのよう中でダビデの歩みは 27 章から新たな段階になります。ダビデは一つの選択をします。

1 節。悩んだ末にダビデは「ペリシテ人の地に逃れるほかに道はない」と判断します。そうすれば、サウルもあきらめて追って来ることはしないだろうと考えました。しかし、イスラエルの領土から出て、ほかの土地に住むことは、主の契約を捨てることになります。26 章 19 節にあるように、イスラエルの土地は主のゆずりの地であり、そこに住むことは主の契約を受け継いでいることなのです。

もちろんダビデは主に従うことを捨てるつもりはありません。ほかの神々に仕えることなど決してあり得ません。それでも置かれている状況の中で仕方なくペリシテ人の地に逃れることにしました。

2 節。その選択をした一つの理由は、一緒にいた 600 人の者たちのこと、そして彼らのそれぞれの家族のことだったでしょう。ダビデと部下たちがそれぞれの家族も連れてユダの荒野で逃げ続けることは、もうこれ以上は難しいと判断したのでしょう。仕方なくこの選択をしたのでした。

このダビデの選択を私たちは簡単に評価することはできないでしょう。答えが見つからない中で選択を迫られる時が私たちにもあるでしょう。その時に主への信頼に堅く立つことができるようにと願います。

敵地に行くことは危険なことです。また、ダビデは以前にもガテに逃げたことがありました。21 章に記されています。その時には、一人で、素性を隠して行ったようです。狂人のふりをしてその場を逃れるという屈辱を経験したガテに再び行くことにどのような思いがあったのでしょうか。

今回は、ダビデは 600 人の部下を伴ってガテの王のところへ行きます。自分たちを傭兵として引き受けてもらうことを交渉したのでしょう。この後のダビデと部下たちの行動から分かります。ガテの王からすると、イスラエルのサウル王から一部の勢力を引き裂いて味方につけることは有益なことと思われたでしょう。

こうしてダビデと部下たちはそれぞれの家族と共に受け入れられて、ガテで王のもとに住むことになりました。このことはサウルに知らされましたが、さすがにサウルも強敵ペリシテの領内に攻め込むことまでして、ダビデを捕らえようとはしませんでした。

### 2. ツィクラグでの行動 (: 5~12)

初めダビデたちはガテで王のもとに住んでいましたが、ダビデはアキシュに申し出ます。5 節。地方の町の一

つの場所に住まわせて欲しいと求めます。一番の理由は、王の監視から離れて自由に行動できることを願ったということだったのでしょう。

6節。ツィクラグはおそらくガテから南に30kmほど離れた所だったと考えられています。ツィクラグに住んだことで、ダビデはサウルからは遠く離れることができましたし、ガテの王やほかのペリシテ人の王たちの監視からも離れることができました。そのような利点がありましたが、逆に南に住む民族から攻撃される危険もありました。ダビデがペリシテ人の地に住んだ期間は1年4ヶ月でした。

王の監視の目から離れたとは言え、ペリシテの支配下で生活するために、ダビデはアキシユの信用を得なければなりません。傭兵として周りの敵との戦いに出て行かなければなりません。その中にはイスラエルとの戦いも起こってくるでしょう。しかし、イスラエルと戦うことができるはずはありません。ダビデはペリシテに忠誠を尽くしているように見せかけていきます。

8節。ゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人は、ユダ部族の相続地やその西のペリシテ人の領土から南のほう、エジプトとの間の地域に住んでいました。それらの民族はイスラエルにとっても敵であったと考えられます。そうした民をダビデと部下たちは襲撃し、略奪して、アキシユのところに帰って報告しました。

10節。「ネゲブ」とはパレスチナの南部の地域を指します。「ユダのネゲブ」とはユダの相続地の最南端であるベエル・シェバの周辺の地域を指すのでしょう。エラフメエル人とケニ人はそれぞれ独立した民族であると考えられますが、イスラエルに友好的だったようです。ダビデたちがサウルに追われる中でそれらの地域にも留まったことがあったようです。

ところが、10節に記されているダビデがアキシユに報告していた地域や民族は、8節に記されているダビデが実際に襲撃した民族と違っていています。明らかにダビデは偽って報告し、アキシユを欺いていたのです。そして、そのことがアキシユに知られないように、ダビデは襲撃した土地の人々をすべて殺してしまい、捕虜としてガテに連れて来ることはなかったということです。自分の偽りを隠すためにそうしていたのです。

アキシユはダビデの報告を聞き、ユダの人々やユダに友好的な人々を襲撃しているというので、ダビデを信用します。12節。アキシユはダビデを完全に信用していることが分かります。しかし実際は、ダビデはアキシユを欺いていたのです。このような行動はダビデにとって不本意な行動であったに違いありません。「ほかに道はない」としてペリシテ人の地に逃れて来た結果、泥沼にはまっていくようなことになってしまいました。

ではどうしたら良かったのでしょうか。このことについても答えは見つからないように思います。すべてをご存知の主の御前で正しい歩みを求めていきたいと思わされます。

「ほかに道はない」と言ってペリシテ人の地に逃れていきました。本当にほかの道がなかったのでしょうか。私たちにも答えは見つかりません。そして、ペリシテの王の信頼を得るためにダビデは欺きを続けなければなりません。どうすれば良かったのでしょうか。私たちにも分かりません。

でも一つ気づくのは、この章には神、主のことが出てこないことです。ダビデが主に伺ったとは書かれていないのです。「ほかに道はない」という状況であっても、主に求めるなら、八方塞がりの中でも、主が道を開いてくださるのではないのでしょうか。「私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません」(Ⅱコリント4:8)。それは神の測り知れない力が私たちに働かれるからであり、その力が私たちから出たものではないことが明らかになるためです。

また、主のことが出てこないことに、ダビデがサウルを恐れ、アキシユを恐れていたことが示されているのではないかと思います。その結果がこの章のダビデの歩みとなったのではないのでしょうか。「人を恐れると畏にかかる。しかし、主に信頼する者は高い所にかくまわれる。支配者の顔色をうかがう者は多い。しかし、人をさばくのは主である」(箴言9:25-26)。人を恐れるのではなく、主を恐れ、主に信頼する者であるようにと教えられます。

私たちも答えが見つからない中に置かれることがあります。それでも選択を迫られることがあります。正解はないかもしれません。しかし、そのようなときにも、主に信頼し、主のみこころを求めて祈る者でありましょう。そのようなときにこそ、私たちの知恵や力ではなく、神の測り知れない力が私たちに働かれ、それが明らかになることを覚えていましょう。